International Exchange Center, Nara Women's University
奈良女子大学

国際交流センター NEWSLETTER

Dec. 2014 Vol.37

Inside This Issue

大学院生の国際学会での発表
南京大学での2年目＆夏季南京大学中国語研修生の報告
留学生の為の茶道教室＆いけばな教室
梨花女子大学Ewha International Co-ed Summer College
センター及び国際課の活動＆来訪者

大学院生の国際学会での発表

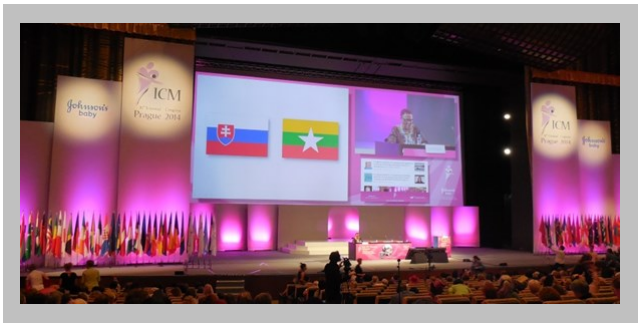
奈良女子大学国際交流センターは、大学院生の国際的な研究活動の促進を図る為、海外で開催される国際学会等で発表する際に必要となる渡航費を支給する支援活動を行っています。平成26年度は、3名の大学院生が選ばれ、国際学会で発表をしました。

The International Confederation of Midwives

神谷摂子　博士後期課程　社会生活環境学専攻 3回生

2014年6月1日から5日間の日程で、第30回ICM大会がチェコのプラハで開催されました。

【学会内容】ICM：International Confederation of Midwives（国際助産師連盟）は、世界中の母親、乳児、家族へのケアを向上させる目的で、1919年ベルギーでの国際助産師学会開催時に、国際的な助産師連合結成について提唱された。その後、1922年の第1回大会開催時、正式にその設立が決議され、1928年に国際助産師連合（International Midwives Union）の名称を経て1954年にICMに改称されました。以後、３年ごとに国際大会を開催しています。



学会の様子

【研究課題】Care for continuation of breastfeeding: Based on reflection of factors that enabled continuation of breastfeeding for one year.

本研究の目的は、出産後、母親が1年間の母乳育児を振り返り、母乳育児が継続できた理由を明らかにすることである。助産所で出産し、母乳育児を1年間継続し、本研究の参加に同意が得られた母親10名を対象に、インタビューガイドに基づいた半構成的面接を行い、得られたデータを質的帰納的に分析しカテゴリー化した。倫理的配慮は、研究者の所属する機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

分析の結果、抽出されたカテゴリーは、【母乳で育てることが自然だという母親自身の意思】【母乳を推奨してくれる専門職の見守り】【出産直後から生後4カ月までの母乳育児の後押し】【母乳を与えることを優先させてくれる家族の理解】などが抽出され、妊娠中からの母乳育児に対する母親の意識の定着や、母乳を推奨してくれる専門職者の理解と見守る姿勢、家族の母乳育児に対する理解と協力が母乳育児を継続するためには必要であり、特に出産後早期から生後4カ月までの期間において、周りの見守る姿勢が重要であることが示唆された。

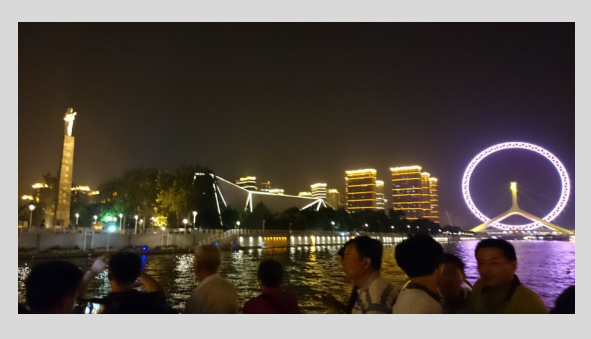
チェコのプラハで行われた、第30回ICM大会では129か国から史上最高の3700人の参加者があり、日本からは265名が参加し、演題提出は世界でも２位の185題でした。一歩会場内に入ると、カラフルな民族衣装を身にまとった各国の助産師たちが集い、にぎやかに交流をしていました。私は今回初めての国際学会の参加で、ポスターセッションに演題登録をしました。ポスターセッションが始まると、活発なディスカッションが始まり、語学力が十分でない私は、はじめは戸惑いを隠せませんでしたが、十分な英語ではなくとも、母子の命を守り、女性の産む力を引き出す仕事である助産師としての思いは共通するものがあり、世界の助産師たちと楽しく交流することができました。今回の経験を通して、もっと国際学会等に参加し、自分の力を高めていきたいと思います。

7th Lighting Symposium of China, Japan, and Korea PROCEEDINGS

上野貴子　博士後期課程　社会生活環境学専攻 1回生

2014年8月22～23日の2日間に中国の天津市で開催された第7回 日中韓照明カンファレンス（7th Lighting Symposium of China, Japan and Korea PROCEEDINGS）に参加しました。カンファレンスは、照明に関する学術・技術交流による日本、中国、韓国の3カ国の照明界の連携強化、地球環境問題に対する地域貢献、若手技術者の国際化育成を目的として開催されており、LED、住宅照明、照明器具または照明システム、照明基準、照明計画などについての論文発表と発表関連施設の見学会が行われています。

カンファレンス前日やカンファレンスのナイトツアーで、天津の街並みを実際に見る機会もありました。中国風と西洋風の建物が混在しており、神戸の異人館のような雰囲気の五大道という場所もありました。照明環境においては、明るい場所と暗い場所が極端であると感じました。場所によっては遅い時間帯でも街が活気づいており、足元がよく見えないような暗い場所でも現地の方々が平気で過ごしていたのにはとても驚き、いろいろな面で貴重な体験をすることが出来ました。



天津の風景

私は、減能グレア（対象物の見やすさを損なうまぶしい光）に配慮した安全で快適な視環境についての研究を行っています。その基礎的研究として、若齢者と高齢者を対象とした日常生活における減能グレアの実態についてのアンケート調査の検討結果をポスターで発表しました。前回の2013年の第6回カンファレンスでも、ポスター発表を行いました。前回は、掲示したポスターの前において行う質疑応答で、質問の意味が理解できず返答に困ったり、他者に助けられたりしましたが、今回は、質問の意味がわかり、身振り手振りをまじえてでしたが質問に対する返答をきちんと行うことができました。高齢者に対する質問が多数あり、中国、韓国の方々の高齢化社会への危惧を伺うことが出来ました。多くの方々が、研究の内容に興味を持ってくださったり、ポスターの配色や図を褒めてくださったりしたこともあり、自信を持つことが出来ました。日本国内で開催される学会では経験することが少ない国際交流や他国の研究成果とプレゼンテーションの方法を学ぶことが出来ました。今後はカンファレンスにおける貴重な体験を糧に、研究を推進していきます。

南京大学との交換留学を終え引き続き留学している先輩から見た中国！

南京大学での2年目

近藤香月　文学部人文社会学科 4回生

中国（大陸）や南京についてどういうイメージを持っているだろうか。中国といえば、日本と尖閣諸島をめぐって関係が悪化していたり、南京大虐殺として知られていたり…。恐らくマイナスイメージの言葉ばかり出てくると思われる。実際、調査によると、中国に対して好感を抱いている日本人はわずか6.8%しかいないそうだ。しかし私は、この6.8%の中の一員だと堂々と言える。何気ない気持ちで、2012年に南京大学語学研修という1ヶ月の語学留学に参加してから、ちょうど2年。語学研修に参加して以来、私が思い描く、無知や差別意識、偏見から形作られた「中国」とは乖離が生じ、語学の勉強も兼ねて私は交換留学に来た。この6月に交換留学生としての派遣期間を終えはしたが、まだ南京にいる。というのも、中国語を使うことにより、英語の話せない私でも「外国人」と仲良くなれると知り、中国語習得に対する意欲が格段に増したからだ。

友人との交流

日本にいては、ドイツ人やポーランド人、アメリカ人と友達になる機会などめったにない。理由は後2つある。１つは、日本から離れた異国にいて日本を客観的に見ることができるようになったからだ。他国から見た日本、別の国の人が日本人を見るとどう見えているのか。今まで当たり前として見ていた日本の気付いていなかった部分にまで目を向けることができてとても有意義である。最後は、さらに深くまで中国を知りたいと思ったことだ。中国の生活習慣、どういう歴史教育を受けてきたか、一般大衆の考え方、国民の祝日の

Food Micro 2014

松本晃子　博士前期課程　食物栄養学専攻 1回生

私は、平成26年度国際学術交流奨励事業に採択していただき、フランスのナントで9月1日から3日まで開催されたFoodMicro2014に参加してまいりました。FoodMicro2014とは2年に1度開かれる国際食品微生物衛生学委員会（ICFMH）が主催する学会であり、世界各国から多くの研究者や技術者が参加する大変有名な国際学会です。今回も35ヵ国から1000名以上の技術者や研究者が出席されていました。主なトピックスは食中毒の原因となる細菌、ウイルスや発酵食品や発酵飲料など、多岐に渡っており、自分の専門としている研究はもちろんですが、専門以外のことも幅広く学ぶことができました。

口頭発表では、各分野の著名な先生方の発表を生で聞くことができ、研究内容だけでなく、その発表の仕方や質疑応答の対応など、その場で多くのことを学ぶことができました。口頭発表に刺激され、ポスター発表でもあちこちで活発な議論が行われ、私も微力ながらも参加することができました。さらに、多彩な分野の研究者の方々と話すことができたので、知識を広め、深めることができました。例えば、日本でもありふれた発酵食品であるキムチの抗肥満作用など、とても興味深く関心を持ちました。また、欧州ではチーズやワインなどが発酵食品としてよく扱われており、注目されている細菌の種類も日本とは少し異なりました。それ故に着眼点などが違い、文化が異なれば研究も異なることを面白く思いました。

また、私自身は大腸菌野生株の様々な環境下での形質転換能の検証という内容でポスター発表を行い、多くの研究者の方々から関心を持ってもらうことができました。

ポスター発表前

質問も多分野の方々からいただき、改めて自分の研究を見つめなおすことができました。その中で、まだまだ工夫できる点や今後の課題点など、新しい物の見方・考え方ができるようになり、自分の中で大きく成長できたように感じました。用意していったハンドアウトは1日で全てなくなり、情報交換のため連絡先を教え合うなど、他の参加者の方々に対しても有益な発表を行えたのではないかと思いました。

今回の学会全体を通して、各分野の著名な研究者の方々と交流できたことは貴重な体験となり、とても勉強になりました。また、本学会は女性の参加者が多く、活発に発表や討論が行われていたことが印象に残りました。さらに、同世代の若い研究者の方の発表も聞くことができ、私も負けていられないと強く刺激を受けました。今後、学んだことを研究に活かすことができるよう、より一層努めていきたいと思います。

過ごし方など、もっと中国の人たちの中に入り込んで、理解したい。外国人が地元の人に受け入れてもらうためには時間がかかる、その時間を費やせるのは、ある程度既に中国の人との間に地盤ができている今現在で、かつ大学在学期間中だけではないかと思い、今は大学を休学して留学を続けている。

日本人で、かつ、中国人に対して好感を抱いていない約93%の人たちは、中国人と交流したことがあるだろうか。中国の人は、「一般大衆と政府は別」とよく言う。一般大衆はいくら政府に対して意見を投じようが、全ての意見が届くわけではない、コントロールしきれないのである。以前、前田敦子が言っていた「私を嫌いになっても、AKBを嫌いにならないでください」という言葉は、この言葉に重なる所があると思う。前田敦子が必ずしもAKB全てを代表している訳ではない。いくらセンターでもやはり一員なだけである。それと同じで、中国の政府が嫌いだからといって中国全体を、中国人全体を嫌いにならないでほしい。いざ中国の一般大衆と付き合ってみると、日本人と変わらない普通の人たちばかりでいい人がとても多いからだ。

中国が好きで他の人にも中国を好きになってもらいたい、中国での留学生活を楽しんでもらいたいという気持ちから、私は南京大学日本人留学生会会長をしている。様々な人と話す機会が増えたことから、語学や中国人との交流以外での、刺激的な体験である。先日まで奈良女の短期研修の学生が南京大学に来ていた。日本人は最近あまり中国大陸に来たがらない中、奈良女の学生が参加してくれたのは、南京にいる日本人として、奈良女生としてとても誇らしく感じた。まず来てみないと印象が好転するわけもないし、また来たいと思えるようにもならない。好きになれとまでは言わないが、まず中国大陸に来てほしい。相手の国を知るためにも、まず中国に来て中国を肌で感じて、そこから何か得るものがあると思うからだ。

＜参考文献＞

益満雄一郎「日本人93%、中国「印象良くない」日中共同調査」朝日新聞デジタル　2014年9月22日、<http://www.asahi.com/articles/ASG9945T5G99UHBI014.html>（2014年9月23日にアクセス）

夏季南京大学中国語研修生の報告

8月22日より中国・南京大学で1か月間研修が行われました。本学からは学生６名が参加しました。研修の様子を報告します。

異国の地でのかけがえのない経験

栗林由佳　文学部人文社会学科 3回生

南京大学学生との交流会

まず恵まれていたこととして、中国語を集中的に学ぶのにふさわしい環境が揃っていたことがあります。中国語習得に特化した奈良女専用のプログラムで授業は行われ、約1か月間日本の大学と同じように、月曜日から金曜日まで授業をみっちり受けたので、いやがおうにも中国語に慣れることが出来ました。また、ご指導頂いた先生方、大学職員の人に恵まれたことも、中国語に親しめた要因だと思います。先生方は、分からない箇所は丁寧に答えて下さり、語学習得に関してのアドバイスもして下さいました。職員の方も、何かと私たちを気にかけて下さいました。

さらに、大学内ではもちろんのこと、大学の外に出ても中国語があふれていたため、普段の生活から中国語を話す機会が生まれ、自然に会話力が以前と比べて向上し、特に聴力を鍛えることが出来たと思います。このように、約1か月間中国語学習にてきめんの環境にどっぷりとひたれたことが良かったです。

次に、この研修中に出会った人に大変恵まれていました。毎日行動を同じくした奈良女生はもちろんのこと他大学からの短期留学生・長期留学生とも知り合うことが出来ました。私たちと目的を同じくする彼らからは、同世代の日本人として大きな影響を受けました。また、語学研修を目的とする人以外にも、研究者として留学した人もおり、目的は違えども異国の地で奮闘する姿に刺激を受けました。日本人以外にも、アメリカ人・韓国人等、多くの外国人とも知り合えました。彼らと話す際には、少々たどたどしくても積極的にコミュニケーションをとることを心がけました。自分の考えを多少中国語で伝えることが出来る程度の語彙力しか持ち合わせていなかったので、英語を交えての会話になりましたが、彼らからは外国人から見た日本や中国についての考えを得ることが出来ました。また、現地の日本語学科の学生と交流できたことも良かったです。彼らから日常的な中国語を教えてもらい、代わりに自分が日本語を教えていました。これらすべての人が、食事に連れて行ってくれたり、一緒に遊びに行ったりと、とても親切に接してくれたおかげで、南京での生活がより楽しく刺激的なものになったと思います。

ひとりひとりが互いの国の好きになれるところを探す

前田夏希　文学部人文社会学科 2回生

中国に着いて驚いたことは、公共交通機関、特にバス、地下鉄の運賃がとても安いことだ。物価の問題もあるだろうが、人口の多い中国で自家用車の交通量を減らすための取り組みなのではと思う。ほかには電動バイクに乗っている人が多く、車道と歩道の間に自転車、バイク用の道があった。ぼんやりとそこを歩いていると後ろから音もなくバイクが近づいてきたりするので怖かった。

夫子廟

正門前

商店や飲食店での店員の接客が日本に比べて荒っぽい。少し高級なレストランでも店員同士が大声で業務連絡していたり、客から見えるところでご飯を食べていたりと、初めは驚いたがこの環境にお互いに慣れるとストレスをあまり感じないだろうと思う。

南京大虐殺記念館の周辺ではさすがに大きな声で日本語を話すことは憚られたが、研修中に日本人だという理由で嫌な目にあったことは一度もなかった。

南京大学の周辺が特に穏やかだということもあるだろうが、日本のテレビで見るような反日感情をみんながみんな持っているわけではないとわかった。「どこから来たのか？」と尋ねられて「日本だ」と答えて、態度を変えられたこともない。

中国へ行くというと周囲の人にひどく心配された。しかし行ってみると日本のテレビで見るようなところではなくあくまで報道は事実の一部分を切り取っているにすぎないと実感した。南京大学の日本語学科の人は日本のアニメや漫画が好きだと話してくれた。スーパーマーケットでも日本の商品を売っており（たまに偽物もあるが）、その品質は信頼されているようだった国家的な悪感情と日本製品、日本文化への嗜好が別軸で同時に存在しているのだろうと思う。文化の違いもありすべてを分かり合うのが無理でも、国家の関係だけに左右されず、ひとりひとりが互いの国の好きになれるところを探せば少しずつ誤解は解けていくのではないかと思った。

南京に行かなければ学ぶことができなかった出来事

大橋京香　理学部物理科学科 3回生

出国時の飛行機の中では中国語が主に話されていて機内食を食べるときに「鶏肉にしますか？魚にしますか？」と乗務員に聞かれたのですが、最初はそれさえも全く聞き取れませんでした。授業が始まって中国語を聞くようになっても最初は全然聞き取れず先生がゆっくり話してくださったり同じ話を2回も3回も話してくださったりしてやっと大体の意味が理解できる程度でした。しかし毎日中国語を聞いてご飯を食べに行くときに店員の話を一生懸命聞いて耳が慣れてくると先生が通常のスピードで話す説明も理解できるようになってきました。そして帰国時の飛行機の中では機内食の何を食べるかの質問も1回で聞き取れるようになりました。日本出国時の飛行機の中で付き添いの先生に「帰りの飛行機の中ではこれくらい聞き取れるようになるよ」と言われて本当に聞き取れるようになるのかが不安でしたが、本当に聞き取れるようになっていたのでとても嬉しかったです。また、中国出国日の朝食を上海のホテルで食べたときに従業員と会話できたことも大きな成長だと思いました。

中国の人は賑やかなのが好きでおしゃべりだということを日本で聞いたことがあったのですが実際にそれを体感することができました。仕事中や食事中など彼らは常に話していて楽しそうでした。店内で席がなければ用意してくれることもありました。

南京大学

日本にいる中国人が賑やかである理由がよくわかりました。また、中国の人は思っていたよりもはるかに優しく、中国人に対するイメージが大きく変わりました。店内のトイレの場所がわかりにくかったらそばまで案内してくれて済んだあとに店内で目が合えば「大丈夫だった？」と中国語で声をかけてくれました。町の人、日本語学科の人、南京大学の人、私が関わった中国の人はみんなとても優しい人たちばかりでした。

中国に研修に行くことはとても抵抗があったのですが、南京での生活は楽しく有意義なものになったので研修に参加してよかったです。

「異文化」としての中国を見て

渡邉瑞穂　文学部人文社会学科 2回生

食堂の様子

中国では、日本では見たことのない光景を多々目撃することになった。たとえば食事の際には、肉から外した骨が、テーブルやトレー上に直に置かれる。若い女性であっても、骨をテーブルに置く。また道路上ではおそらく日本の60倍近くクラクションが使用されている。バイクが歩行者脇を通る際や、自動車が他の車を避ける際に鳴らすからである。

上記の場面に遭遇した時、初めはぎょっとした。もし日本で、肉をこそげ取った骨を卓上に放置すればひんしゅくを買うだろう。道路上で断続的にならされているクラクションについても、日本であれば「警音器の乱用」となるだろう。

だがここで強調したいのは、「そこに悪意は全くない」ということである。またそのやり方が合理性を有していることも確かなのである。ルールの下で生きる様を見ることになった。

中国は、私自身の常識とは異なるルールを有する社会として私の前にあった。「異文化を理解しよう」ということはしばしば語られる。では異文化とは何なのか。私個人が真っ先に思い浮かべるものは、博物館のガラスケース内に収まる民芸品や、年に一度の祭りの様子だったりする。それらも、異文化を象徴するだろう。だが、非日常空間のものや過去の遺物だけでなく、今現在息づく人々の暮らしもまた異文化である。その至極当然のことを、今回の研修で初めて認識したように思う。

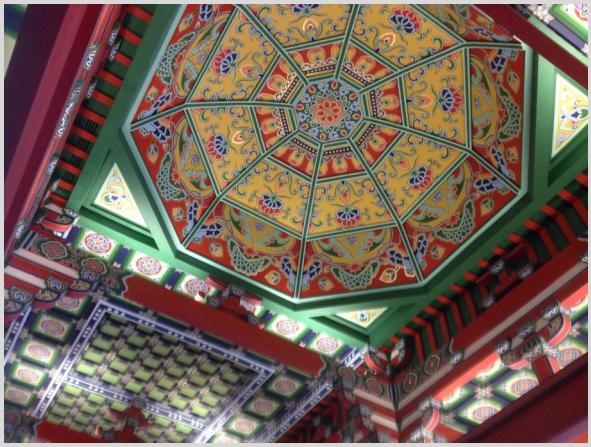
日本を見つめなおす

角谷友理香　文学部人間科学科 2回生

中国へ行くのは初めてであり、日ごろのメディアからの情報などから、不安に思う面も多々あったが、実際生活してみると、周りの環境も非常に過ごしやすく、中国の良い面にたくさん気づくことができた。毎日が充実した、実りある南京生活を送ることができた。

授業についてであるが、授業はほぼ中国語で行われ、はじめのころは聞き取ることすらできずに雰囲気で先生の話をつかもうとしていた。しかし、日に日に耳が慣れていき、理解することに時間はかかったものの、授業での受け答えも徐々にレベルを上げてできるようになったと思う。そして、とりわけリスニングの力が大分ついたと実感した。

朝のバイキングは、中国の家庭の朝ごはんを体感することができた。お昼の学食は、日本と比べて非常に安い料金で満足する量を食べることができた。ここでも、麻婆豆腐などが中国の独特の風味だったので、本場の雰囲気を味わうことができた。夜は皆でそろって外食することがほとんどであった。



総統府の天井

留学生寮で過ごしたために、他の国からの学生と交流する場面がたくさんあった。その中で、カンボジア人やスダン人など、日本に興味のある方々と中国語で交流し、日本語を教えてあげたことが印象的である。ここにおいて、日本の世界での位置づけを知ることができ、文化の素晴らしさなどを再認識することができた。南京大学の日本語学科生との交流は４週に渡って行われたが、どの時間も楽しく過ごすことができ、良い経験となった。今後も交流を続け彼女たちが日本に来る際は中国語で案内し、より話題に富んだ話ができるように学習を継続したいと強く感じた。

自分で感じた「中国」

河下ひかる　文学部人文社会学科 2回生

研修へ行く前、私は中国語の聞き取りが本当に苦手でした。行きの飛行機の中でのアナウンスもほとんど聞き取れず、到着後の入国審査でも係員さんの言っていることがわからない状態でした。いざ行ってみると１か月もここで生活していけるのかと不安が募るばかりでした。南京大学での生活が始まってからも、先生や職員さんに話しかけられても聞き取れないために答えられず、気まずい思いをしたことは何度もありました。しかし、授業で習った単語・言い回しを並べながらでも、こちらが伝えようと努力すれば相手も理解しようとしてくれます。聞き取れなくてもあきらめず積極的になることが大切だと学びました。

他にも中国に行くにあたり日中関係・大気汚染・食べ物など心配していた点はありましたが、特に大きく問題になるようなことはありませんでした。抗日戦争勝利記念日・満州事変勃発の日は南京に滞在中でしたが、日本人だからといって騒ぎになることもなく、むしろそんな日だということを忘れて普通に外出していたほどでした。

夫子廟

日中関係・大気汚染等に関しては、現在多くの日本人がマイナスのイメージを抱いていることと思います。しかし少なくとも私たちの訪れた南京・上海の人々は日本人を暖かく迎え入れてくれましたし、街の環境もそれほど悪くはありませんでした。この研修で日本に居てはわからない現在の中国の様子を一部ではありますが知ることができたと思っています。イメージではなく自分自身の体験から中国の姿を捉えることができ、中国に対する理解が以前より深まりました。帰国後も学んだ中国語を生かして中国人と積極的に交流するとともに、自分の捉えた中国の姿を一人でも多くの日本人に伝えたいです。

留学生のための茶道教室＆いけばな教室体験の感想

**年に2回センターより留学生を対象に文化体験を提供しています

茶道教室、楽しかったです。インドネシアでは参加したことがありますが、やはり日本で参加するのは一番よかったと思います。インドネシアではただお茶の飲み方だけを勉強しました。でも、昨日の茶道教室に細かいことまで教えていただいたので、本当に嬉しかったです。最初は、お茶の味は苦いと思いましが、飲んだら美味しいと思います。そして、お菓子も甘くて美味しかったです。茶道教室に参加させていただいて、ありがとうございます。とてもいい経験になりました。　アトミ・フェルナディタ (インドネシア)

お点前の説明

お花は昔から好きで、特に日本に来てから華道に憧れ、ずっと華道を習いたかったです。こんないい機会を与えて下さって、ありがとうございました。生け花はきれいに見えるのが、生けるときのバランスと生けている人の気持ちが大切だなと今回の体験で感じました。また、花言葉も素敵ですね。花言葉を考えたり、名前を付けたり、お花って生けた人の代わりに気持ちをしゃべってくれるんですね。お花の言葉を聞き取れるのにもっと勉強しないといけないですね。　サラナ(中国)

完成した生け花を前に

梨花女子大学 Ewha International Co-ed Summer College 2014

交換留学の派遣先協定校である韓国・梨花女子大学からサマーカレッジについて招待がありました。本学から３名の学生が参加しました。

韓国での17日間

成田佳織　生活環境部生活文化学科 2回生

今回、奈良女子大学の協定校である韓国の名門、梨花女子大学の夏季のプログラムに参加し、韓国で１７日間のとても貴重な夏を過ごしてきました。

このプログラムは語学とともにhalf-day tripを通して韓国の文化を学べるもので、一日ずっと韓国語を勉強するというよりは、文化的体験を通して韓国語や英語といったコミュニケーションツールとしての外国語を学ぶ、という感じでした。それまで韓国語は授業で学んだことはありましたが、韓国人の韓国語を聞くのも、会話をするのも初めてでした。しかしやはり生の、本物の韓国語で会話をするのはすごく楽しかったです。すごく刺激的な毎日で、二週間がたつ頃には自分が会話しているのは韓国語なのか英語なのか、それとも日本語なのかという感覚もわからないほどになっていました。

現地の友人と

私はKPopが好きなので楽しかったし、それ以上に韓国の現代文化としての現状を見ることができたのがとても興味深かったです。

語学に文化、おまけに楽しめちゃうという韓国での体験。旅行ではできない経験ができるのは留学だけです。大学生のうちにこのような体験ができたことは自分にとって大きなことです。

다음은 너의 번이에요. 화이팅! The next is your turn. fighting!

センター及び国際課の活動

2014/10/3	新入留学生オリエンテーション・後期チューターガイダンス
2014/10/10, 24	Coffee Hour
2014/10/20	ニュージーランド研修説明会第2回
2014/11/6	外国人留学生日本語スピーチ大会・学長主催留学生懇親会
2014/11/7	JSAF海外留学説明会
2014/11/10	ニュージーランド研修説明会第3回
2014/11/14, 28	Coffee Hour
2014/11/19	留学生のための生け花教室
2014/11/26	留学生のための茶道教室
2014/12/4	奈良地域留学生交流推進会議主催日本語スピーチ大会
2014/12/8	ニュージーランド研修説明会第4回
2014/12/12	Coffee Hour
2014/12/18	ルーヴェン大学教員との交流会

センター来訪者

●2014/11/20

中国駐大阪総領事館

副領事　盛　弘強　氏（せい　こうきょう）

教育室長　李　春生　氏（り　しゅんせい）

●2014/11/28

Prof. Jaroslaw Walkowiak　他2名

(ポーランド、Poznan University of Medical Sciences)

●2014/12/17,18

Prof. Dr. Adrien Carbonnet

(ベルギー、University of Leuven)

編集後記: 年明けのニュージーランド研修に向けて着々と準備が進んでいます。今年度は30名の学生が研修に参加する予定です！(編集者:Yoko Sen)

奈良女子大学　国際交流センター

NEWSLETTER　2014年12月発行

〒630-8506 奈良市北魚屋東町
TEL: 0742-20-3736
Email: iec@cc.nara-wu.ac.jp
http://www.nara-wu.ac.jp/iec/index/